

40. 興味あるCTの経過を示した急性CO中毒の1例

林 克二

(九州労災病院高圧医療部)

急性CO中毒に関するCT-Scanについては、多数の報告がある。大脳皮質および、淡蒼球の低吸収像(L.D.A)を主病変とし、CT-Scanの変化と、CO中毒の重症度、予後などについての検討がなされている。今回、初期のCTでは、大脳皮質および淡蒼球にL.D.Aを認め、HBO 2週後のCTでは軽度の改善を認めたが、4週後のCTで、大脳皮質全般におよぶ、著明な脱髄および、淡蒼球の出血と思われるH.D.Aを両側の淡蒼球に認めた症例を経験したので報告する。

症例 22歳男性。車の中に練炭を持ち込み自殺を図る。CO吸入時間などは不詳。Comaの状態で見送られ、気管内挿管、O₂吸入、shock therapyなどを受け、発見後、5時間で、HBO目的にて入院。初診時、Coma state、pain刺激に対して徐脳硬直肢位、BP 68 mmHg、両側Babinsky+、動脈血は、pH 7.288、BE-8.9、CO-Hb3.5%であった。入院時のCTは、白質および淡蒼球にL,D,Aを認めた。HBO(2.8ATA O₂60分、1日1~2回)を繰り返し、2週目には、徐脳質硬直の状態、開眼の命令にわずかに応じるなどの改善を認め、CT上も、白質のL.D.Aの改善を認めた。その後もHBOをつづけたが、3週目より大発作の頻回出現があり、四肢のrigid-spasticityの亢進著明となる。4週目のCTは大脳白質全般の広範な脱髄を思わせるL.D.Aの著明な増強および、両側淡蒼球は非対称性の出血性変化を思わせるH.D.Aの出現を認めた。この時点でH.B.Oを中止し、全身管理のみ行って来たが、vestibular stateのまま不変である。8週後のCTは、4週目と同様の白質の脱髄、cerebral atrophy、脳室の拡張が出現したが、淡蒼球の出血は吸収された。CT上淡蒼球の出血を思わせるH.D.Aについては報告がなく、興味深い。本症例のCTの変化について報告すると共に、CTの変化について考案を行いたい。

41. 一酸化炭素中毒における高気圧酸素療法の効果—特にCT ScanおよびSPECTからの検討—

黒田清司* 枡内秀士* 鎌田 桂***

遠藤英雄* 古川公一郎** 星 秀逸**

金谷春之*

〔岩手医科大学 *脳神経外科
同 **高次救急センター
同 ***高気圧環境医学治療室〕

一酸化炭素(CO)中毒患者に対し、可及的早期に高気圧酸素療法(OHP)を施行し、CT所見や脳血流を中心に検討したので報告する。

【症例および方法】対象は、52例のCO中毒患者であり、OHPは43例に、頭部CT Scanは28例に行い、10例ではSPECTによる断層脳血流測定を行った。CO-Hb濃度は、40例にて測定した。

【結果】A. OHP前後の変化(a)来院時のCO-Hb濃度の平均は27.9%(n=38)であり、OHP後には平均3.0%(n=23)と正常範囲に復した。来院時に強度の意識障害例でも、OHP後には意識の改善を認めた。しかし、OHP後に、失見当識の強いものや、昏迷以下の例は予後不良であった。(b)CT Scan; 28例中13例に異常を認めた。OHP前に低吸収域(LDA)を認めた6例中4例は、極めて予後不良であり、そのうち3例で淡蒼球にLDAを認めた。OHP施行にもかかわらずLDAが出現した7例中5例は、CT上白質に軽度のLDAを示したが、ADL 1と予後良好であった。B. 脳血流(n=10)(a)1週以内の測定例では、2例は正常であり、後頭葉に局所の高血流を示し一時的に皮質盲となった1例と、全脳に高血流を示した2例の計5例は、予後良好であったが、正常より低血流の2例は予後不良であった。(b)1週以上での測定例では、予後良好の1例は正常patternであり、予後不良の間欠型の2例は、全脳の低血流を示した。

【結論】1. 急性期OHPによりCO-Hb濃度および意識は著明に改善した。2. OHPを行っても、CT上LDAが出現したが、前頭葉白質の軽度LDA例は、予後良好であった。3. 発症早期に淡蒼球にLDAを認めるものは、予後不良であった。4. 間欠型は、OHPが遅れた症例であった。5. Anoxia後のtissue acidosisに起因すると考えられる脳血流高値がみられた。